

島井宗室(1539-1615)に関する史料に見える武士との関係とその意味

Relations with warriors and their meaning as depicted in sources related to Shimai Sōshitsu (1539-1615)

要旨

島井宗室という人は、16世紀の博多の代表的な豪商の一人である。商人として茶の湯の世界に参加したり、筑前の武士に協力をしたりした。そして、自治都市と知られる堺の茶人たちとの関わりを築いていく過程も見られる。堺の豪商は、博多のと比較したら、信長・秀吉政権との関係がもっと深かった。しかし、島井家の文書を見ると、日本の政治界から離れた博多においても豪商の抱負も見える。その抱負を表現するのは、史料における武士のイメージだと思う。

歴史学の視点から見れば、島井家の文書は、極めて面白い。その理由として幾つかの点が挙げられるが、ここで一番集中したいのは、文書の多様性なのである。堺の天王寺屋家のような茶会記がないが、書簡だけではなく、『島井文書及び記録』、『島井家系図』、『島井家の由緒記』、『島井氏年録』などの様々なタイプの史料が残っている。

上の史料の相互関係は別の問題で、全ての史料に見える共通点は武士との関係である。その関係については、田中健夫氏が『島井宗室』（1961年）という伝記にも述べたが、それはファクトグラフィーを中心にした一冊である。つまり、宗室は茶の湯を手段として使って、武士との人間関係を拡大するという解釈がある。

しかし、宗室に関する文書をもう一度解釈すると、それは武士との関係の実像（ファクトグラフィー）を記録するものだけではなくて、その関係の特別なイメージを築こうとする試みとして扱う必要があるかなという疑問が浮かぶ。つまり、島井家の史料に見える、宗室の秀吉や家康との関係のイメージが、島井家の栄光を語る手段として解釈する必要がある。何かというと、16世紀の豪商の社会的地位を築いたのは、貿易や営業だけではなくて、有力な武士との関係でもあった。

私の発表の目的は、島井宗室に関する史料を紹介し、それに見える武士との関係に関わる記事を例に挙げ、その関係のイメージとその意味を説明することである。

グレン・イエンジェイ / Jędrzej GREN
ワルシャワ大学 / University of Warsaw